

私の好きな法律モノの



第14回 身近過ぎるプロのお話 画家 谷脇哲也

以前、引越をした際、アトリエとして使用していた部屋の原状回復（照明の取り替え等）に手こずった私が、そのことを義弟に話したところ、義弟はその場で作業着に着替え始めた。私があわてて「違う。違う。業者を紹介して!」とお願いすると、義弟は「僕が業者ですけど。」と笑った。そうだった、彼はリフォーム会社の社長である。私が5時間かけてもできなかった作業を彼はわずか5分で片付けた。

はたまた昨年、父が突然亡くなった後、いたずらに複雑に見える相続手続の書類の山と格闘していた私が妻に「だめだ。さっぱりわからない。プロに頼もう。」と告げると「私はそのプロだけど。」と妻。そう、弁護士彼女は見事に全てを片付けてくれた。

身近過ぎるプロの姿は見えにくいもの。最も頼もしい味方なのだが……。

さて、今回ご紹介したい作品は、映画「黄金のアデーレ～名画の帰還～」です。国家を相手に、歴史に翻弄され剥奪された画家グスタフ・クリムトの傑作「アデーレ・ブロッホ＝パウワーの肖像I」を正当な持ち主である自分に返して欲しいと要求する女性主人公と駆け出し弁護士（家族ぐるみの友人の息子）の物語。主人公にとって、友人の息子は身近過ぎるプロのため、言いたい放題、弁護士も母親に言われて渋々関わっているので喧嘩になったりするので、共に事件の解決を目指す中で、弁護士はその仕事（事件）の意味を自らの中にルーツとして見だし、依頼者である主人公は、封印してきた過去と向き合い、身近過ぎる弁護士との信頼関係を揺るぎなく固いものにし、それが困難な挑戦にくじけそうになる彼女の気持ちを支えていきます。

美しいオープニングのクリムトの制作風景が印象的。興味のある方はぜひ。